



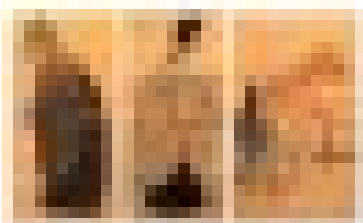
日本能狂言 在中国的译介

中国における能狂言の翻訳と紹介

丁曼 著



學苑出版社



日本能狂言 在中国的译介

中国古典文学外译与海外汉学之研究

王德 著

中国文联出版社

本书获中央高校基本科研业务费专项基金资助

本书为北京高等学校青年英才计划项目成果,项目编号 YETP1346

中国における能狂言の翻訳と紹介 日本能狂言在中国的译介

丁 曼 著

學苑出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日本能狂言在中国的译介/ 丁曼著. —北京: 学苑出版社, 2015. 1

ISBN 978-7-5077-4683-9

I. ①日… II. ①丁… III. ①日语—翻译—研究
IV. ①H365.9

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2014) 第 296618 号

责任编辑: 潘占伟

出版发行: 学苑出版社

社 址: 北京市丰台区南方庄 2 号院 1 号楼

邮政编码: 100079

网 址: www.book001.com

电子信箱: xueyuanpress@163.com

销售电话: 010-67601101 (销售部) 67603091 (总编室)

经 销: 新华书店

印 刷 厂: 北京信彩瑞禾印刷厂

开本尺寸: 880×1230 1/32

印 张: 8

字 数: 207 千字

版 次: 2015 年 1 月第 1 版

印 次: 2015 年 1 月第 1 次印刷

定 价: 28.00 元

目 录

序 章 中国における日本文学の翻訳と紹介

第一節	各時期の翻訳動機の相違	(3)
第二節	翻訳方法の模索	(8)
第三節	日本文学の翻訳における能狂言の位置付け	(11)
第四節	和歌の翻訳方法をめぐる諸意見と能の中国語訳の 文体の形成	(15)

第一章 唐事能「邯鄲」の中国語訳

第一節	「読書人」という翻訳語をめぐって	(30)
第二節	「南柯」という語彙の使用	(34)
第三節	「縦(ほしいまま)」の強調	(38)
第四節	文体について	(42)

第二章 「砧」と「井筒」の中国語訳

第一節	文体について	(54)
第二節	内容の解説—妻の恨み	(60)
第三節	引用の部分	(67)

第四節	語彙や表現	(70)
第五節	注釈のつけ方	(79)

第三章 「隅田川」と「飛鳥川」の中国語訳

第一節	「隅田川」と「飛鳥川」の文体	(90)
第二節	中国における両曲の評価及びその特異性	(101)
補 説	銭稻孫訳「謡曲「養老泉」韻調訳」と「盆樹記(鉢木)」	(122)

第四章 「熊野」の中国語訳

第一節	内容について一階級論で読み解く貴公子と平民の 葛藤	(135)
第二節	詩歌の引用部分	(144)

第五章 中国における能狂言翻訳の全体像

第一節	申非訳謡曲十八曲の全体像	(156)
第二節	狂言の中国語訳	(161)
第三節	自国文化の存在—中国における能狂言翻訳の 全体像	(180)

第六章 能狂言と中国古典演劇の比較研究

第一節	能における劇外の声と人称の問題	(187)
第二節	能狂言の表現における共通の性格	(193)

第三節	元雜劇における「一人主唱」及びその実質	(197)
第四節	中国における語り物と演劇の関係に関する 捉え方	(202)
第五節	元雜劇以外の中国演劇	(204)
第六節	結論	(206)

終 章 世阿弥能楽論の翻訳状況と今後の課題

第一節	劉振瀛の能楽論観	(215)
第二節	両訳における相違点	(220)
第三節	今後の課題	(224)
補 説	中国の音韻学について	(234)
付 録(采訪翻译家申非)		(237)
謝 辞		(248)

序 章

中国における日本 文学の翻訳と紹介

中国における能狂言翻訳の状況について論じる前に、まず中国における日本文学の翻訳の全貌を把握した上で、その中での能狂言の翻訳の位置づけを考察すべきであろう。

中国における日本文学の翻訳に関して、二〇〇一年に刊行された王向遠氏による『二十世紀中国的日本翻訳文学史』^[1]がある。これは二十世紀の百年間に、中国で翻訳され、紹介された日本文学作品を比較的広い視野で網羅した研究著書である。勿論、個々の作品やその中訳の評価に関して、一例えば能狂言や人形浄瑠璃などの古典演劇の場合―必ずしもその考察が十分とは言えない場合もある。しかしながら、近現代の各時期に翻訳された主要な日本文学作品を整理し、初めてその全貌を網羅したという点においては、従来のこの方面における研究上の一空白を埋めたと言えよう。本章では、王氏の成果を借りながら、中国における日本文学の翻訳の全貌について論述したい。なお、王氏が主として研究対象として扱ったものは、単行本や全集、選集などの書籍であり、各雑誌に掲載された訳文にまで視野を広げきれなかった面があるが、本論文では必要に応じ、特に能狂言の翻訳状況に関わるものについては、雑誌掲載の訳文も調査対象とする。

第一節 各時期の翻訳動機の相違

一、近代日本の模倣^[2]

明治維新後の日本は、様々な面において中国の憧れの対象となった。自然科学や政治改革などの広い分野にわたって日本から学ぼうとし、さらには日本語に翻訳された西欧著書を学びたいという動機によって、清代末期頃から翻訳作業が始まった。実用主義の考えに基づいて、文学作品の翻訳に先立ったのは自然科学などの分野であり、文学作品の翻訳が始まってからも、『佳人奇遇』や『経国美談』『雪中梅』といった、政治小説などの日本の近代化を象徴すると思われる作品が多数であった。また、春柳社による日本近代演劇の翻訳や翻案も行われたが、最初に翻案したのはやはり『経国美談』であった。これは、当時中国の近代化志向という時代背景とも関わっているといえよう。

五四運動の時期、「人間性」に対する関心が知識人の中で高まってきた。そして、社会の近代化に伴い、変動期に生きる人間個々の苦悩や葛藤そのものを描く日本文学作品が盛んに翻訳されるようになった。当時の知識人、ことに周作人をはじめとする日本留学経験者たちは、日本の小説を翻訳し、紹介したのである。夏目漱石、森鷗外、武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉、田山花袋、島崎藤村、谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介、菊池寛、葉山嘉樹、国木田独步などの作品は数多く翻訳された。また、山本有三の『同志の人々』、中村吉蔵の『星亨』、岡本綺堂の『修禅寺物語』などの近代演劇や、『桃太郎』や『浦島太郎』などの民間説話、小川未明の童話なども相次いで紹介され、翻訳された。

しかし、これほど盛んに行われている日本文学作品の翻訳の中、
詩歌の翻訳は少ない。石川啄木や佐藤春夫らの現代詩の翻訳も試
みられたが、それはあくまでも少数にとどまっている。和歌や俳
句などの翻訳を試みた例は殊更少なく、この時期では周作人一人
しかいない。後に詳述する周作人訳の『狂言十番』も、この時期に
刊行されたものである。

二、日本軍占領時の翻訳と紹介

一九三七年以降、偽満州のみならず、陥落区が相次いで増えるこ
とによって、日本軍占領区における日本文学作品の翻訳と紹介は、
この特殊な時期の背景を色濃く背負うようになった。その背景は
主として二つにまとめられる。一つは、当時日本国内の国策とも
深く関わっており、愛国と忠君を喚起し、文化面において戦争を美
化し、支援するという狙いである。もう一つは、植民地の文化政策
の一環として、日本文化、日本精神などの「日本的」なものへの重視
である。無論、両者は切り離されることなく、渾然一体となってこ
の時期の翻訳作品に影響を及ぼしている。例えば、獅子文六『海
軍』、丹羽文雄『海戦』、多田裕計『長江デルタ』、石川達三『生きてい
る兵隊』、火野葦平『麦と兵隊』などが翻訳された。また、『芸文雑
誌』や『中和月刊』などの、日本文化を紹介するための雑誌も相次い
で創刊され、『万葉集』や『伊勢物語』などの節訳も行われた。中国
の「中」と日本の「和」を取っている『中和月刊』の雑誌名からも、当
時の強い植民地的色彩が窺われる。後に詳述する錢稻孫氏が試み
た『万葉集』や謡曲の翻訳は、この時期になされたのである。

それらの刺激を受けながら、反戦文学や一部の左翼作家の作品
の翻訳と紹介も、この特殊な時期と背景下に必然的に起こったも
のと考えられる。鹿地亘による『和平村記』などが翻訳され、『三兄

弟』話劇も相次いで上演された。

様々な意味において、この時期の特殊性は後の長い時期に亘って、日本文学作品の翻訳と紹介、ひいては日本研究のあらゆる分野に多大な影響を与え続けている。二〇〇五年に、「中国人民抗日戦争暨世界反ファシズム戦争勝利六十周年記念」というテーマの下で、王向遠氏による『日本対中国的文化侵略—学者、文化人的侵華戦争—』が、「日本対中国的文化侵略叢書」シリーズの一環として刊行された。その中の一段を次に掲げる。

日本人覬覦中国、由来已久。十六世紀大將軍豊臣秀吉発動侵朝戦争、揚言其目的是「直擣大明国」。在民間文人中、最早通過文藝的形式表達侵華意念的是十七世紀日本著名戲劇家近松門左衛門、他在『国姓爺合戦』中讓日本人占領了南京。^[3]

中国に対する日本人の覬覦は従来ある。十六世紀に豊臣秀吉による朝鮮出兵の目的は「大明国制覇」である。民間の文人の中では、文芸によって中国制覇の意図を表したのは、十七世紀の著名劇作家の近松門左衛門で、氏は自著の『国姓爺合戦』において、日本人による南京占領を果させたのである。（訳文は筆者による、以下同）

王氏の論の正否はさて置き、一九三〇、四〇年代の侵略戦争や占領が及ぼした影響は、今現在も多大であることにまず注目しておきたい。さらに、能狂言の翻訳もつまるところ、この枠組みから脱していないことについても後述する。

三、中華人民共和国成立後の翻訳と紹介

王向遠氏は、共和国創立直後の三十年（一九四九年から一九七八年まで）と改革開放以降（一九七九年から二〇〇〇年まで）に分け

て論じたが、この二つの時期に共通する特徴が数多く見出せることから、本論では王氏のような細分を敢えて行わない。その共通の特徴は、次のようにまとめることができよう。

まず、出版社の国営化に伴い、何を翻訳対象にすべきなのか、何を翻訳する必要があるのかについて、中央政府や中国共産党の指導の元で判断され、系統的に選定されるようになったことである。王向遠氏が指摘したように、一九四九年から一九五三年までの数年間に、徳永直の『静かなる山々』を除けば、日本文学作品の翻訳は皆無に近い。しかし、当時中国文化部の部長を務めた茅盾氏が一九五四年に「全国文学翻訳工作会議」^[4]で、文学作品の翻訳に対する期待を述べてから、文化大革命勃発までの数年間の間に、数多くの日本文学作品が翻訳され、紹介された。周作人訳の『古事記』、同氏訳の式亭三馬『浮世風呂』をはじめ、『浮雲』を含む『二葉亭四迷小説集』、『樋口一葉選集』、『小林多喜二選集』、『徳永直選集』、『宮本百合子』などの左翼文学、『二十四の瞳』や『真空地帯』などの反戦文学、そして原爆文学などもこの時期の翻訳対象として選出され、中国における日本文学作品の翻訳史上最大の繁栄期を迎えたという。また、三島由紀夫の諸作品も、批判用の「反面教材」という意味で、関係機関の内部出版物として刊行されたのである。

文化大革命という空白期を除けば、日本文学の全貌、すなわち現近代のみならず、古典作品まで視野に入れ、その中から「名著」たる作品を翻訳し、更に従来紹介して来なかった「名著」を一から紹介するという方針は文化大革命の前後二期を問わずに一貫している。『源氏物語』、『落洼物語』、『万葉集』、『古今和歌集』などの全訳計画は、文化大革命以前にすでに立てられ、文革によって中断されたが、改革開放後に相次いで刊行された。周作人（この時期の署名は「周啓明」）と申非訳の『平家物語』、銭稻孫訳の近松門左衛門や井原

西鶴の作品などはいずれもそれにあたる。それらのほとんどが、人民文学出版社の「日本文学叢書」シリーズとして、一九八〇年代初頭から計画的に刊行され続け、一九九〇年代まで継続されている。日本文学の全貌を比較的広い視野で捉え、紹介しようとした姿勢の中で、それまでは各誌の断片的な紹介や翻訳にとどまっていた謡曲や和歌の訳本も誕生したのである。能狂言に関して、周啓明訳『日本狂言選』、申非訳『日本謡曲狂言選』『日本狂言選』があり、それについては後に詳述する。

しかし、何を紹介すべきなのかという判断が、一定のフィルターを通して下されていることは、程度の差こそあれ、終始変わらない。三島由紀夫の『豊饒の海』は、一九七一年から一九七三年までの間に、人民文学出版社の「批判用」内部出版物として刊行されて以来、三島のすべての作品の翻訳と紹介が停止状態となった。一九八五年に、主管機関から特別な承認を得て初めて公開刊行が許され、その後一時期、三島作品が相次いで翻訳され、刊行されるようになった。一九九五年、葉渭渠、千葉宣一、ドナルド・キーンによる三島由紀夫に関するシンポジウムが中国で行われる運びとなったが、ちょうどその年が、中国抗日战争世界反ファシズム戦争勝利五十周年に当たり、様々な記念イベントが行われる中、三島由紀夫のシンポジウム開催は不適切だと判断され、主管部門の指示により中止された。その前後に盛んに翻訳され、刊行された三島由紀夫シリーズの一連の作品は、一時販売禁止の対象となったが、一九九八年以降によりやく解禁されたのである。ちなみに、申非、許金龍訳の三島『弓月奇談、近代能楽、歌舞伎集』も当該シリーズの一つであった。また、後の第四章においては、「熊野」の中国語訳を通して、この時期の時代背景が、訳作に投影した特色について、詳述する。

近年徐々に、出版物に対する管理や統制が緩和されつつあり、「百家争鳴」の局面を導いたことは見逃せない。上記の三島由紀夫のシンポジウムを主催しようとした学者の主張や、議論が行われること自体、統制の緩和を側面から物語っている。その傾向の下で、多岐にわたる日本文学作品が大量に翻訳され、紹介されるようになり、中国における日本研究の一環としても行われるようになったのは、近年来の動きである。王向遠氏が『二十世紀中国的日本翻訳文学史』で視野に入れてきたのは、二〇〇〇年までの翻訳状況であるが、二〇〇〇年以降も、その方針が受け継がれていると言える。後に言及する張哲俊氏『中国題材的日本謡曲』は、その傾向の下で、「人文日本新書」シリーズとして二〇〇五年に刊行されたものであるが、当該シリーズ所収のものとして、村上春樹、吉本ばななの諸作品、少女漫画など、サブカルチャーも含む多岐の分野にわたる研究が含まれる。そのほか、日本に伝わった敦煌説話と敦煌仏教文学、空海と『文鏡秘府論』、日本に伝わった「三国主義」、中国に題材を求めた日本漢詩、日本近代の漢文学、日本東洋学と近代中国などのテーマも取り上げられていることから、比較文学の視点において、歴史上における両国の交流が相互の文学にもたらした影響に対する関心も窺われる。

第二節 翻訳方法の模索

十九世紀の翻訳家は、「西文」と「東文」の語を以って、西洋の言語と日本語を区別して呼んだ。そもそも「東文」及び日本文化そのものは、中国から大きな影響を受けながら発展してきたもので、長い間中国人の関心を引くほどの存在だと思われていなかった。しかし、明治維新後、日本の変革を学び、あるいは日本を通して西欧を

学ぶという意図から、日本語自体をも重要視するようになった。その大きな理由はやはり、中国語と日本語は同文同種であり、日本語のほうが西欧の言語より早く習得でき、日本語著書から翻訳したほうが、西欧著書からの翻訳より遥かに迅速で効率的であるという考えである。勿論その背景にあるのは、漢字、漢語語彙の存在の外に、当時の日本語の文体が擬漢文体もしくは漢文訓読体であるという事情である。

直訳と意識の当否の駆け引きは十九世紀の時点ですでに現れ、現在でも大きな課題として議論され続けている。その究極の所は、内容と文体などあらゆる面において、従来の中国のものに「帰化」させて翻訳する姿勢なのか、他国のものを「模倣」して翻訳する姿勢なのかという相違である。これは、中国の伝統文化がどれだけ妥協でき、外来のものを何処まで受け入れられるのかという原点に遡ることでもある。そもそも先述した翻訳対象の選択というフィルターが存在もつまるところ同源である。例えば、梁啓超訳の『佳人奇遇』は、中国の古典小説の各章の構成習慣から、原作の各章の内容を適宜に添削したり、その前後位置を改変したり、更に清国の立場から不適切と思われる原文も削除したりなど、明らかに原作を中国のものに「帰化」させる姿勢が窺われた。

五四運動以前の翻訳作品のほとんどは、古文の文体で翻訳されたものである。当時の白話文の文体はまだ定着しておらずに、「直訳」を唱えてきた魯迅、周作人の主張は、当時の翻訳活動にだけではなく、語彙や文体などを含む当時の白話文の形成にまで影響を及ぼしたと言える。「経済」「革命」「動員」「取締」「申請」など数多くの日本語の語彙が中国語に伝来し、そのまま中国語の語彙として定着した。また、「平気地把煙吸着」のような、日本語の文法や語順を模倣し、そのまま構文して中国語化する試みも、翻訳作品の中で

なされた。中国語としては不自然で、中国語らしさを欠くものに対して、最大限の妥協をし、外来のものを最大限の許容度で受け入れようとした姿勢は、その時期最高潮に達したとも言えようか。

ここで一つ特筆すべきなのは、周作人の模索と試みである。氏は近現代文学作品のみならず、俳句、狂言、『古事記』や式亭三馬の作品など、日本文学の古典をも網羅した、数少ない翻訳家の一人である。氏の翻訳作品を俯瞰すれば分かるが、近現代の作品は無論のこと、たとえ原作が古典文学であっても、文体に限って言えば、中国の古典文学作品の文体に「帰化」させる姿勢を敢えて取らなかったのである。次で掲げるのは、氏訳の『枕草子』の一段である。

春天是破曉的時候最好。漸漸發白白的屋頂、有点亮了起来、紫色的云彩微細地飄橫在那里、這是很有意思的。（春は曙。やうやう白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。）

周氏が『枕草子』訳を完成させたのは文化大革命勃発前だが、刊行されたのは一九八八年である。上記の文体は明らかに現代白話文であることに相違ない。それに対して、同じ箇所の錢稻孫訳は、次のようになっており、中国の古典作品に「帰化」させる姿勢が窺われる。

春宜曙。東方漸白、山後微明。雲含紫氣、縷縷輕漾。

また、周訳『枕草子』と同年に刊行された王以鏞（一九二五年～）訳の『徒然草』は、次のような古文調で翻訳されており、中国の古典作品に「帰化」させる姿勢を示している点では、周氏の翻訳方針と明らかに異なる。

書法拙劣者无所顧忌而放笔作書、可嘉也。自称書法不佳而請